

実り豊かな「下山の時代」(その2) 「経済成長」って いったい何でしょう

図書館友の会 木村元廣

1、「成長」という言葉が持つ魅力とパワー

五木寛之氏が『下山の思想』(幻冬舎新書)で提起された内容を、「もう少し考えてみたい」と思って図書館に行くと、『経済成長神話の終わり』(アンドリュー・J・サター著 講談社現代新書)という本に出会いました。「なるほどなあ」と思ったのは、『成長』を他の言葉。たとえば『膨張』や『膨満』、もっとニュートラルに『拡大』などに置き換えてみると、私たちが受ける印象はがらりと変わるのではないのでしょうか」という指摘でした。

著者は「成長」という言葉が持つパワーに着目。「成長という言葉からは、健康、微笑む子どもたち、わかば、ひまわりの花、豊かに茂る樹木などといったイメージが湧いてくる。経済が『膨張』したとか、価格が『バブル』状態だという表現はあまり見ない」と…。

確かに「成長」という言葉は魅力的です。子どもが成長する姿を見るのは楽しい。そこには希望があります。「大きくなったね」と声をかけると、子どもは微笑みます。でも、18歳前後から身長は伸びなくなります。さらに体重が増えることは「成長」ではなく「肥満」と言われ、あまり歓迎されません。「ダイエットしなきゃ」という声が聞こえてきます。

つまり「子どもの成長」という言葉には、身体的な成長だけでなく、学力や運動能力、技術力、創造力、さらには他人への思いやりの心や忍耐力など多種多様な内容が込められているのです。また、年代に応じて「成長」という言葉の内容も質的に変化します。

ところが、経済成長の指標であるGDP(Gross Domestic Product)が示すのは生産の数量だけ。生産の質や内容、国民生活の質的变化などは考慮されていません。

2、GDPや株価が示しているもの

『経済成長神話の終わり』では、GDPについて説明しています。GDPとは、ある国の経済が一定期間内にどれだけ生産したかを示す数値です。でも、この額をはじき出すときにもとになるのは、食べ物やテレビなどといったモノ、及び散髪などのサービスだけです。中古品の取引も、新しく生産されたものでないのでGDP計算には含まれません。

また、モノやサービスは「市場取引」を通して売り買いされなければGDP計算には含まれません。自分の子どもや孫の育児、炊事・洗濯・掃除などの家事労働、ボランティア活動なども大変意義のある活動ですが、市場取引を介さなければ対象外です。

私は畑を借りて野菜を作って知人や友人に分けています。でも、市場取引ではないので対象外。GDPに含まれるのは肥料やタネを買う費用だけです。つまり、GDPはその国の経済活動全般を示す指標ではなく、国民生活の豊かさまでは反映されていないようです。

そして、株式市場や債券市場、その他の金融市場での取引は、モノやサービスが含まれていないので除外されます。株価は景気の動向を示す指標のように毎日報道されますが、私はいつも不思議な感じがしています。今回のコロナ禍に際しても、当初は株価が大きく下落したが、しばらくたつと取り戻した…。「経済は大変な状況なのに、なぜだろう?」と。

その疑問に対して著者は、「株価というものは非合理かつ心理的なものだからだ。株価はニュースや噂、期待、恐れなどで簡単に上下する」と述べています。その株式売買合計額は世界のGDPの総額を上回っているそうです。さらに「世界で取引されているのは株式や外国為替だけではない。膨大な数の金融商品が世界で売り買いされているのだ。それらの合計をはじき出すのは不可能だ」とまで述べています。

3、経済をゆがめ格差を拡大した「マネー資本主義」

問題なのは、これら金融商品などの売買取引によって生み出された儲けの大部分が、ごく一部の富裕層に分配されていること。それによって世界規模で貧富の格差が急速に拡大していることです。その流れを生み出したのは「新自由主義」の潮流でした。

新自由主義の代表的な経済学者フリードマンは、かつて「経済的自由は、政治的自由より優先されるべきだ」と述べました。それに従って米国・英国(そして日本)を中心に次々と「規制緩和」が進められ、国際的にも資本・貿易の自由化、金融の自由化などグローバル経済化が一挙に進められました。

規制が解かれ自由になった金融資本は世界を駆け巡り、ますます肥大化。今や金融経済の規模は実物経済の規模をはるかに上回っています。それは世界的に設備過剰になって、高い利潤を生み出す投資先が少なくなったことを意味します。その余剰マネーの投資先として、ITと金融自由化を結合した「市場」をつくり出し、数々のマネーゲームを駆使してさらなる利潤を稼ぎ出している…。私はそのように感じています。

また、フリードマンは「企業の唯一の社会的な責任は、株主のために可能な限りおカネを稼ぐこと」だと述べました。事実、多くの企業は「株主の意向」を最優先にしていますが、そのことによって健全な経営が阻害されているのが現実ではないでしょうか。

以前の株主は、株を買ったら配当を目当てに何年も保有するのが一般的で、そのことによって企業経営を支えてきた面がありました。ところが、現在の投資家の多くは、できるだけ安い価格で株を買ひ、できるだけ早く高い値段で売り抜けようとしします。つまり、株式は単なる投資の対象でしかなくなり、個々の企業がどうなろうと関係ないのです。近年、日本企業の株式は外国人による所有割合が高くなり、その傾向は一層強まっています。

この場合、収益が「一定」することは「悪い」ことになります。毎年、いや毎四半期ごとに成長しないと「前年比で負け」の烙印を押されます。その結果、企業経営者は目先の戦略を追い求めることになり、ひたすら「成長」をめざします。しかも、正社員の首を切り、派遣社員やロボット、海外からの労働者でその穴を埋めれば、株式市場では「経営改善が進んだ」と評価され株価も上がるので、リストラがどんどん推進されます。

実物経済から乖離した金融資本が、株式等を通して企業経営への影響を強め、その結果として実物経済をゆがめている…。それが格差を広げる大きな要因ではないでしょうか。

4、マネー資本主義に対抗する『里山資本主義』

(1)世間の「経済の常識」を問い直す

以前紹介した『里山資本主義』という本には、マネー資本主義に対するアンチテーゼが満載されています。GDPとは何かを考える素材にもなるので、もう少し紹介しましょう。

○「経済の常識」に翻弄されている人とは、たとえばこのような人だ。

もっと稼がなきゃ、もっと高い評価を得なきゃと猛烈に働いている。必然、帰って寝だけの生活。ご飯を作ったりしている暇などない。だから全部外で買ってくる。洗濯もできず、靴下などはしょっちゅうコンビニエンスストアで新品を買っている。…もらっている給料は高いかもしれない。でも毎日モノを買う支出がボディブローになり、手元にお金が残らない。だから彼はますますがんばる。がんばったらがんばった分だけ給料は上がるが、その分自分ですることがさらに減り、支出が増えていく。『世の中の経済』にとって、彼はありがたい存在だ。しかし、いびつな生活だ。

その青年は、やがてリストラされ、失意の末に田舎に帰り、地元でとれる果物で完全無添加ジャムを作るジャム屋さんで働きます。給料は以前の10分の1程度。とんだ貧乏暮らしが始まったと思いましたが、以前の生活よりずっと豊かになったのです。

近所のおばあさんが持てあましていた畑を借り受け、野菜作りも始めました。そのおばあさんは自分が作った野菜も分けてくれます。また、ジャム屋に集まってくるおじさんたちに、石油缶を改造した「エコストーブ」の作り方を教えてもらい、そこに釜や鍋をのせて食事の支度をするに…。すると光熱費も減り、財布から消えるお金が劇的に減ったのです。しかも、食べるものが劇的においしくなりました。新鮮な有機野菜と、「最新型炊飯ジャー」よりもおいしく炊けるエコストーブのご飯…。以前の都会暮らしの時は、職場以外で話をするのはコンビニの店員くらいでした。それと較べると毎日の暮らしが格段に楽しくなり、人間らしくなりました。でも、その「豊かさ」はGDPにとってはマイナスになるのです。

(2) 過疎・高齢化を逆手にとったユニークな地域づくり

その「エコストーブ」を開発したのは、広島県庄原市に暮らす和田芳治さん(当時70歳)です。手作りできるエコストーブの製作費は5,000~6,000円程度。燃焼効率も高く、裏山で拾ってきた雑木5本で1日分のご飯が炊けます。

和田さんは、「日本人が昔から大切にしてきた里山暮らしを現代的にアレンジし、真の『豊かな暮らし』として広めよう」と、1982年に仲間と「過疎を逆手にとる会」を立ち上げ、里山暮らしの楽しさを訴える様々な活動を続けています。

その会の主要メンバーの一人である熊原保さんは、高齢者や障がい者の施設を運営する社会福祉法人の理事長。空き家を活用してデイサービスセンターやレストラン、保育所など、「福祉の実験」に取り組んでいます。ある日、デイサービスを利用しているおばあさんとの会話の中で、「うちの菜園で作っている野菜は、到底食べきれない」という話が出たのをきっかけに「みなさんの作った野菜を施設の食材として使わせてもらえますか」とのアンケートをとると、デイサービスを利用するお年寄りを含め100軒ものお宅から「ぜひ提供させてほしい」と返事がきたのです。

熊原さんは、和田さんと相談して「地域通貨」も作り、野菜を提供してくれた人々に地域通貨を配り、それをデイサービスやレストランなどで使えるようにしました。おばあさんといっしょに野菜を収穫し、「広島の中央卸売市場の価格で買い取らせていただきます」と言うと、「そんなのダメよ。ただで持って帰ってよ」という返事…。押し問答の末、市場価格の半額の地域通貨が渡される…。おばあさんは、おじいさんの所へ行って、「これでレストランに行っ、ご飯を食べたりしてくださいって!」とニコニコ顔で地域通貨を見せる…。

レストランの敷地の隣には保育園が併設され、食事をした後、希望すれば子どもたちと遊ぶこともできます。みんな子育ての大ベテランです。「今日はこれでおしまい」と言うと、子どもたちは泣き出し「もっと遊びたい。次はいつくるの?」。そんな風景が各所で見られるようになりました。そこで重要なのは、デイサービスに通うお年寄りは「一方的にお世話される人」ではなくなり、新たな「張り合い」が生まれて元気になったことです。

そのようなお年寄りを、和田さんは「高齢者」ではなく「光齢者」と呼びます。人生いっぱい経験して「輝ける年齢に達した人」です。省エネは「笑エネ(笑うエネルギー)」と書きます。「楽しくエネルギーを使おう。エコストーブを使えば、みんなで笑いながら火をおこすことができる」「笑エネが出ると、体だけでなく心も温まる」という訳です。そして里山暮らしの仲間は「志民」と呼びます。「市民」ではなく「志をもった人々」。人のため、地域のため、社会のために、それぞれ知恵や力などを提供し合おう。それが里山を活性化させるということです。

5、もう一つの経済指標~ブータンのGNH(国民総幸福度)

皆さんはブータンという国をご存知ですか。東日本大震災の後に国王夫妻が来日した際、

「国民総幸福」をめざす国づくりで日本でも話題になりました。図書館友の会では、ブータンで青年海外協力隊員として活動してきた釜野真理子さん(泉大津市出身)を招き、「若者が見た『幸福の王国』」と題した講演会を開いたことがあります(2014年8月)。

ブータンの教育や芸術、子どもたちの様子や人々の暮らし、文化など、若者から見たブータンの姿について話していただき、「身近な感じがした」「かつての古き良き時代の日本と似通っている面もあり、ほんわかした気持ちになった」など、ノスタルジーを感じた人も多かったようです。

世界がブータンに注目しているのは、「経済成長は開発の目標ではない。所得向上と生産拡大は人間の能力を高める可能性がある手段に過ぎない。」「人間開発で重要なことは、平和と彼らが楽しむ安らぎ、人間の人生の豊かさである。」という立場で、GNH(国民総幸福度・Gross National Happiness)を指標とする国づくりを進めていることです。

ブータンでは何よりも、伝統文化を守りながら自然と共に暮らすこと、家族や友達に囲まれた人間らしい生活をするを大切にしています。GNHでは、①持続可能かつ公正な社会経済的発展、②環境の保全と持続的な利用、③文化の保護と進行、④良い統治(ガバナンス)の4本の柱(重点課題)に基づいて、9項目の「幸福の指標」(①生活水準、②心の豊かさ、③健康、④時間の使い方、⑤教育、⑥文化の多様性、⑦よい統治、⑧共同体の活力、⑨環境保全・生物多様性)を掲げています。

世界では、急激な経済発展よりも環境を重視した持続可能な経済社会を提唱する国が増えつつありますが、まだその多くは理念の段階で、十分な具体化にまでは至っていないのが現状でしょう。しかし、ブータンでは1990年前後の時期からGNHの具体的推進に取り組んでいます。2008年にはGNH委員会を首相直属の独立組織として再編成し、政策の具体化や各種プロジェクト、GNH指標を用いた国勢調査などにも取り組んでいます。

そして、「幸せ」と答える人の割合は、2010年度は89.6%、2015年度は91.2%と増加。「とても幸せ」と答えた人は43.4%だそうです。日本で同様の調査をしたら、どんな結果になるのでしょうか。

※ ブータンについて詳しく知りたい人は『現代ブータンを知るための60章』【第2版】(平山修一著 明石書店)を読んでみてください。巻末には多くの参考文献も紹介されています。

6、「下山の時代」に求められるのは、本当の「経済成長」への脱皮

『里山資本主義』の著者は、「なにも、便利な都会暮らしを捨て昔ながらの田舎暮らしをしなさいというのではない。『ブータンみたいな幸せ』を押しつけようというのでもない」と語りかけます。また、「人が生きていくのに必要なのは、お金だろうか。それとも水と食料と燃料だろうか」と問いかけ、「われわれが考える『里山資本主義』とは、お金の循環がすべてを解決するという前提で構築された『マネー資本主義』の経済システムの横に、お金の依存しないサブシステムを再構築しておこうというものだ」と語ります。そして、それは「日本社会の息を止めかねない本当の危機に対する、最大で最後の対抗手段かもしれない」と述べつつ、里山資本主義の内包するマネー資本主義へのアンチテーゼが、経済構造の「変容を促す力の一つとして作用することは間違いない」と述べています。

そこで、改めて「成長とは何か」を考えてみましょう。親は、子どもが自分のことだけでなく家族や他人への思いやりの言動を見せた時、「成長したな」と実感します。「下山の時代」に求められるのは、そのような質的転換を伴う「成長」への脱皮ではないでしょうか。

『里山資本主義』の著者は、50年後には「当たり前になっている」だろうことを信じ、熱意を込めて書きました。その中の「世の中の先端は、もはや田舎の方が走っている」という言葉に、私も深く共感します。

記 2020.12.5